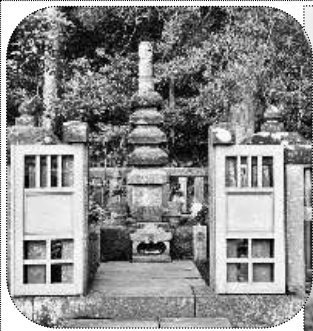




↑ 源頼朝の墓

中 15 回生 (3 年次) →
修学旅行記念写真
鎌倉大仏 (1913 [大正 2])



A c a n t h u s

(土浦一高・旧土浦中学とその周辺の物語)



進修同窓会 HP にアクセス

第 191 号

2025 (令和 7) 年 7 月 15 日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
HP <http://www.sin-syu.jp/>

土浦中学校の修学旅行 4 中 14 回生鎌倉・横須賀旅行
明治 40 年代以降、土浦中学校の修学旅行は、年度により多少の違いはありますが、1 年県北、2 年東京、3 年鎌倉・横須賀、4 年日光、5 年箱根が、それぞれのコースとなりました。
今号では、1912 [大正元] 年 10 月に実施された中 14 回生 3 年次の鎌倉・横須賀旅行を、1913 年 2 月発行『進修第 16 号』「修学旅行記」で辿っていきます。
引用文中の旧字体は新字体に改めました。
なお、引用文中の【 】は筆者による注記です。

江ノ島

10 月 9 日、午前 7 時過ぎに上野駅に到着した土浦中学校 3 年生の修学旅行隊は、東京市電の路面電車で新橋まで行き、新橋から東海道線で横浜へ。横浜で外国人居留地、横浜港、日本丸などを見学。「……、外国人が、沢山居る。車夫【人力車を引く男】までが、自由に英語を操って居たのは、感心に堪へなかつた。……」。「門出三年太田賢雄」と、地方の中学生らしい感想を洩らしながら、横浜駅に戻り、再び東海道線に乗り、藤沢駅で下車。藤沢駅からは、「北条通ひのガタ馬車」^(注1)ぐらいゆれる電車【江ノ電】に乗って片瀬現江ノ島へ。
雨中、長い栈橋を渡り、江ノ島の宿岩本楼に到着。荷物を預けると三々五々、島内を散策。江島神社、龍窟、稚児ヶ淵と巡る途中では、「さぞこの壺焼きあり。此地の名産とやら、めずらし。」と、腹の虫も鳴いていたようです。

^(注1)北条通ひのガタ馬車
土浦く北条く筑波を運行していた乗合馬車。鉄輪を付け、ガタガタと大きな音を立てて走ったので「ガタ馬車」と呼ばれ、駆者の吹き鳴らすラッパの音に因んで「トテ馬車」の名でも親しまれた。

鎌倉

10 日は、一日中行軍をして、名所見学。龍の口(瀧口寺)で日蓮の法難を偲び、腰越の満福寺では義経・弁慶主従の苦衷に涙し、更に、七里ヶ浜、稲村ヶ崎、と鎌倉武士たちが鎧を削った古戦場を辿っていきます。極楽寺坂切通しを越えると御霊神社。祭神は鎌倉権五郎景正(景政) 16 歳の頃、後三年の役⁽¹⁰⁸³⁾「永保 3」年⁽¹⁰⁸⁷⁾「寛治元」年⁽¹⁰⁸⁷⁾で、右目を射られながらも奮闘した「武勇の気迫」に心打たれます。長谷寺に詣で、像高 9.18 m のご本尊木造十一面観音立像を拝し、「顔面には慈悲の色を顕せり。」と、観音様の功德に浴しました。高徳院鎌倉大仏では 1 銭を支払い、胴内を見学。最後に記念に、と皆で大仏に登り写真撮影。国宝に指定⁽¹⁹⁵⁸⁾「昭和 33」年指定されている現在、このようなことをしたら、即座に警備員が飛んで来て、阻止されてしまうでしょうが、当時は、文化財保護の意識も薄く、無頓着な時代でした。

美男の大仏様^(注2)に別れを告げて、この日一番の目的地鎌倉宮に向かいます。大塔宮護良親王【後醍醐天皇の第三皇子】を祭る社殿と社殿裏の土牢を拝観。土牢は護良親王が幽閉されていた所で、「……、懸崖絶壁の中腹を穿てる者窺へば昼尚暗く凄愴の気惨として人に逼る【迫る】、実に建武二年七月廿二日の事なり兇賊・淵辺義博の毒刃にかかりあへなき最後【最期】をとげさせられ給ひし遺蹟なり憤慨胸に満ちて去る能はざりき……」。「鎌倉めぐり三年川島雄」と、悲憤の思い、遣る方無しです。

鎌倉宮社前の茶屋で昼食後、一行は源頼朝墓に詣でます。

「七百余年前六十余州を一意の許に動し、関東鎌倉に覇府を開きし右大臣征夷大将軍源頼朝の墓を探らんと数十級の石段を匍匐すれば松杉の老木さながら銚の如く、嵐翠【らんすい】山に霧が立ち込め、木々の緑の鮮やかなこと【雲を凝し【こら】して昼なほ暗く吹き渡る風は太古の響きあり。計らざりき、此の如き老杉鬱々たる間に昔を忍ぶ頼朝公の孤塔立ちあらんとは……」。

豪慢なる葛は、墓内を擅いまゝ【ほしいます】にしひたげ野犬来りて痕跡を残す。昔知り顔なる老松の梢には腥風【せいふう】生臭い風【せい臭い風】吹き入りて昔日の恨を訴ふるが如く昔の繁栄なる【成る】面影今いづこにかある。

嗚呼もし彼の【かの】当年北条氏の詐謀にかゝらざりせば九泉の旅の後も家康の如く莊嚴なる霊墓を造られしものを。

余は感慨無窮去らんと欲して去る能はず躊躇や、久うして一行に尾して遂に白旗神社に赴けり。【源頼朝の墓に詣づ【三年市原義平】】

頼朝墓に詣でた一行は、白旗神社、鶴岡八幡宮、建長寺を訪れた後、鎌倉駅から横須賀線を利用し逗子駅下車、葉山に宿を取りました。

横須賀

^(注2)美男の大仏様
与謝野晶子は、1900 [明治 33] 年頃に鎌倉大仏を訪れ、「鎌倉や御仏なれど釈迦牟尼は美男におはす夏木立かな【恋衣】1905 年 1 月発行」と詠んでいる。

11 日、逗子から横須賀へ入った時の様子を 3 年久保田麟一は「横須賀軍港を観る」と題して次のように記しています。
「逗子駅より汽車に乗る。人々こみ合ひて、桶に蜜柑を詰めたるが如く、身動もならず。只時々、人々の袖間より山の青きを見るのみ、俄に電気灯の点ぜるを訝る程に、突然闇に入る。入りてはまた出で、出でゝは又入る事数回なり。其度毎に煤煙車窓より襲ひ来りて呼吸せまる。偶々壁立せる嶮山三方より海に迫る一海湾ありて、灰色に塗られたる、駆逐艇と覚しきもの数隻海上に浮べり其彷彿【ほうふつ】ぼんやりとしてはつきりしないさま】だに見る能はざる内トンネルを過ぎ、はや横須賀に着けり。見渡せば嶮山三面を繞り【めぐり】市街块状【けつじよう】「块」は、「環や輪の 1 ケ所が切れた C 字形」の意をなして、湾縁に立ち並べり。轟々丁々たる音は此の小区域に溢れ、車馬絡繹【らくえき】道路に人馬などの往来が絶え間なく続くさま】として路上に満つ。湾内には大小の軍艦、水雷艇、厳然とし

て城郭の如く小船は波を蹴つて織るが如く其間を往来す。殊に、無線電信柱の九天を突くは物珍しく覚えぬ。……。」と、海軍鎮守府・海軍工廠等が置かれ、日本屈指の軍都として急速に発展する横須賀の姿を伝えていきます。

物珍しさに加え、工廠の激的な音に驚いているうちに、一行は海軍機関学校に到着。校内を案内され、最新の石油エンジンに舌を巻き、魚形水雷に胸を躍らせます。殊に目に付いたのは、室外に据え置かれていたロシアバルチック艦隊第1戦艦隊所属の水雷艇。煙突は傾き推進器も破れ、全艇蜂の巣状態の姿に、日本海海戦の激しさを実感しました。

機関学校を辞し、次に海軍工廠を見学。久保田は造船廠の様子を、

「……、【巡洋戦艦】比叡は落成に近づき千万の職工蟻の群れの如く働けり。その響き、轟々として、我が声すら聞き別くること難し。レール敷きつめし道を行く、煤に汚れし黒色の鉄板屋根両側に並びて轟々たる響きの中に油じみたる服をまとひし職工千鈞の鉄槌を自由に操つて居る様。勇ましとも勇まし、……。」と、記しています。中学生にも見学を許すなど、機密保持等に関しては無頓着な時代でした。

海軍下士官集会所で昼食を終え、戦艦「老岐」に向かいます。老岐は、元バルチック艦隊の第3戦艦隊旗艦であった戦艦「インペラートル・ニコライ1世」で、日本海海戦で連合艦隊に包囲され降伏、日本海軍によって鹵獲(ろく)され(注3)、老岐と改名されていました。

3年寺門信比古は、老岐乗船の体験を「軍艦老岐」と題して次のように記しています。

「歩くとふらふらする縄梯子を伝うて身は早九千何百噸かの一大艘艦の後甲板に立つた、やがて案内の水兵について一同二組に分れて艦内を観る先づ前艦

橋に登ればそこから横須賀の湾内が一目に見え湾内に碇泊して居る大小の船艦、陸上に海兵団(注4)の兵舎や山上に立つて居る無線電信の柱など皆目新しく感ぜられいづれも軍港だなどいふ考を起させる、こんなことを考へてゐる内に皆下へ下つて行くから自分もついて行くとかねて見たいと思うて居た司令塔へ入った周りは堅固な鋼鉄で包まれて居り内には艦の脳髄とも見るべき羅針盤その他諸種の命令機関が備つて居る此の中に居る艦長の考一つでかゝる大軍艦を自由自在に動かすことが出来るかと思つていさゝか驚かざるを得ない、水兵に導かるゝまゝにそこを去つていよいよ十二時【インチ】の巨砲を見る。乃ち前部の甲板に出ると音に聞く十二時がによつきりと砲塔からつき出して居るさらに砲口を見た時は一入【ひとしお】大きな砲を増した実にこれだけを見て海戦の壮大なことがわかるが今はこんな砲は旧式に属して十四吋の大砲が採用されて居ると聞いて益々驚いた、それから艦内を一巡して後甲板に出ると目の前には嘗て日本海海戦の折敵司令官が士官室の卓子掛【テーブル掛け】を白旗に代へて掲げたといふその大櫓【だいし】よう 大きな帆柱・マスト」が巍然【ぎぜん】高く聳え立つさま」として中空に聳えてゐる当時の有様が目に見える様な感が殊に深かつた、……。」

と、巨艦とその巨砲に驚きを隠せません。しかし、「ニコライ1世」が「老岐」と改名されて岸壁に繋がれ、学生生徒の見学コースになっている現状を「恥をさらすなり。」と断じています。確かに、大海原を遊弋(ゆうよく)し戦火を交えてこそその軍船で、囚われの身となつては恥に違いありませんが、その責めは、バルチック艦隊司令長官ロジェストヴェンスキー中将、第3戦艦隊司令長官ネボガトフ少将をはじめとするロシア海軍の将官、将

兵が負うべきものです。久保田は「横須賀軍港を観る」を、

「此を以つて知る国の発展は其の兵力の如何に関するにあらずして、独り其の士気の如何に関するものなるを」と結んでいます。

老岐から下りた一行は、横須賀駅から東京に戻り、宿に入りました。

(注3) 日本海軍によって鹵獲され

日本海海戦の1905年5月28日、日本海軍によってロシア艦5隻が鹵獲され、6月6日に改名の上、軍艦籍に編入された。

戦艦「オリョール」は戦艦「石見」、「セニャーヴィン」は海防艦「見島」、駆逐艦「ベドークイ」は「草月」、「アブラクシン」は海防艦「沖島」、そして、戦艦「ニコライ1世」が戦艦「老岐」と命名された。

なお、老岐は1915(大正4)年10月に、標的艦として巡洋戦艦「金剛」「比叡」の砲撃で沈められた。

(注4) 海兵団

旧日本海軍で、各軍港に置かれた陸上部隊。所轄の鎮守府に属し、軍港の防備・警備に当たったほか、補欠員として入団する下士官・兵を収容、教育し、艦船部隊などの欠員補充を担った。

東京

12日朝、宿を出た一行は、青山練兵場跡(現神宮外苑)に設けられた青山葬場殿に向かいます。この年(1912(明治45)年)の7月30日、明治天皇が崩御され、同(大正元)年9月13日に大喪の礼が、ここで執り行われました。午後8時、葬場殿に向かう葬列が皇居を出発すると、夜間にも拘わらず、沿道は葬列を見送る人々で埋め尽くされ、立錫の余地もありません。午後11時前、葬場殿に到着。深夜に「葬場殿の儀」が執り行われました。儀式終了後、明治天皇の柩は、御霊柩列車に乗せられ、翌9月14日午前2時に「青山仮停車場」から、中央線・山手線・東海道本線・奈良線を経由して、伏見桃山陵に移され、その日のうちに埋葬されました。大喪から1ヶ月を過ぎたこの日も、哀悼の誠を捧げる人々は引きも切らず続

いています。一行も列を整え、服装を正して葬場殿に赴きます。竹の矢来を繞らし、広々とした葬場殿は質朴ながらも荘厳、生徒たちの心も自ずと改まります。各々御大喪当日の葬礼に思いを致し、頭を垂れ、敬礼。感に打たれ、刻々と移りゆく時を忘れて、御霊柩車を拝しました。葬場殿を後に、乃木將軍の墓に詣でるため、塵立ち舞う混雑の中を青山墓地に向かいます。乃木希典陸軍大將(母堂寿子刀自は土浦土屋藩士長谷川金太夫の娘。霊堂が市内東光寺にある。)は、明治天皇の葬列出発の時刻に合わせて、乃木坂の自宅で、「うつ志世を神去りましゝ大君乃

みあと志たひて我はゆくなり」の辞世の歌を残して、静子夫人とともに自刃、殉死されました。乃木家の墓地には老若男女が、將軍の忠魂を弔おう、と次々と歩を運んでいます。捧げられた花が墓地を埋め、墓前には何十束という線香が淡い煙を上げています。生徒たちは言うに言われぬ悲哀の感が胸に迫り、人知れず涙で袖を濡らしました。



乃木大將の墓 (左側は静子夫人)

青山葬場殿で奉悼の襟を正し、乃木將軍の墓前に哀悼の意を捧げた一行は、上野不忍池畔の拓殖博覧会場へ急ぎました。博覧会場では、日清・日露の戦役で日本領となった台湾・樺太の展示館を見学し、上野駅から帰途に就きました。